

能〈玉井〉の再考・新演出について

田村良平* (村上 湛)

二〇一八年(平成三十年)二月の東京・国立能楽堂では「月間特集・近代絵画と能」と銘打つ企画があった。同月二十八日の企画公演ではその一環として「水底の彼方から」と副題を付した公演が持たれ、拙作新演出による能〈玉井 龍宮城〉が初演された。ここではその内容の概略報告を試みたい、

能の演出再考あるいは新演出については、従来も折に触れて記録しているとおろ、能役者の側から依頼されて任に当たることが多い。これまでも国立能楽堂主催公演では、能〈松山鏡〉末尾の演出再考(二〇一五年十月三十一日・国立能楽堂企画公演「古典の日記念」鏡に映るものは)、復曲能〈菅丞相〉の新演出(二〇一六年五月二十六日・国立能楽堂企画公演)などを担当してきたが、前者はワキ・福王茂十郎氏の、後者はシテ・大槻文藏氏の個人的委嘱がきっかけとなったもの。それぞれ国立能楽堂の母体・独立行政法人日本芸術文化振興会から相応の文藝費が支出されたとはいえ、能役者と私の半ば個人的な関係によるもので

あった。すなわち、独力の作業として国立能楽堂からこの種の委嘱を受けたのは初めてのことである(小田幸子氏と共同作業としては、二〇〇五年十一月十一日・第二十四回特別企画公演「能と神楽」における復曲能〈鐘巻〉の演出監修を勤めたことがある)。

記紀神話による能〈玉井〉は華麗な演出効果に秀でた能を数多く作った観世小次郎信光の真作である。もっとも、神霊をシテとする脇能であり、なおかつ皇祖神をワキとする格式から、江戸時代初期以降きわめて様式的な演出統制が計られて、原作の真意を達していないとする意見も多かった。古くは一九八八年一月七日・梅若能楽学院での梅若会一月定式能において堂本正樹の演出による新案が試みられている。また、これは偶然ではあるが、今回に先立つ二〇一八年一月十三日・宝生能楽堂での鏡仙会一月定期公演〈玉井〉も大胆に演出改変を加えた舞台だった。

今回の私案はこれらとはまた別の新たな方向から、この能の可能性を捉えなおす意図によるものである。以下、今回の新案の要点を列記する。

①「豊玉姫」役を前後同一人が通して勤め、後場「海龍王」はこれと別人が演ずる。

原作の設定がこうであることは明白。前記二公演もこの形式に拠った。すなわち、豊玉姫と海龍王と「両シテ」になるわけである。もっとも、今回のチラシおよびプログラムではシテ・ワキの呼称をあえて避け、役名だけで記されている。

②ワキ・彦火々出見尊の扱いを事大主義から解き放つ。

現行演出では莊重な「半開口」の扱いで登場し、ワキツレとして従者を伴うが、これは脇能の定式に合わせたの位付けである。今回はそれを

改め、海中探索の独り神として演出した。

③両姫に比して彦火々出見尊を上位の神格として扱う。

現代の能の関係性でいえばシテ方が上位、ワキ方が下位に属するものの、これは後世、職責分担が弁別され式楽体制が確立してからの慣例である。「まれびと」として歎待される皇祖神の尊貴性がこれによって減ぜられる現行演出を改め、原作の意図を汲むかたちで「彦火々出見尊の物語」として全体を統一した。

④作り物を工夫する。

今回の新演出で最も目立つのはこの点である。井筒と桂立木を別々に出す煩瑣を避けてこれの一つにまとめるプランは一九八八年すでに試みられているが、一畳台の上に小宮を据えて龍宮を示し、ワキがここに入るのは従来になかったことである（ワキが作り物に入って扮装を改めるのは今回が能演出初のオリジナルかと思う）。小書（特殊演出）として「龍宮城」の名を付したのはこの意図を明確にするためであった。

梅若実氏（この舞台が改名後の記念すべき初シテであった）をはじめ福王和幸氏ほか、これまで何度となく作業を重ねてきた布陣で、外部者の手になる新案にも万事にわたり快く対応して頂き、終始、気持ち良く仕事ができただけでありがたかった。太鼓には当初、観世元伯氏が予定されておられ、チラシにもその名が記載されていたものの、二〇一七年十二月一日に五十一歳で逝去され、出勤頂くことが叶わなかった。今後の能楽界の柱石となるべき巧手であり逸材。実に痛惜の極みである。

間狂言（貝尽）が能（玉井）に挿入される正式なかたちで上演されたのは、野村又三郎家としては明治以降初めてのことという。その意味でも記念すべき舞台となったのは喜ばしい。なお余談ながら、小道具の水

桶は新規に作成したが、曲物職人の払底と経費の問題もあり、現代流行の3Dによるモデリングで安価に済んだことを付言しておく。伝統藝能の内幕の一端を示す逸事である。

全体の上演時間は一〇〇分ほど。現行演出で長い時には一三〇分ほどかかることもある能だから、詞章のカットはないにもかかわらず今回の所要時間はまずスムーズといったところだろう。慣れれば九〇分ほどで切り上げることも可能かと思う。

今回の公演は映像資料として公開され、国立能楽堂図書室付属の視聴ブースで簡単に実見できる。機会を改めて再演の折があれば、これまた幸いこの上ないことである。

二〇一八年（平成三十年）二月二十八日 国立能楽堂第一八八回企画公演

《月間特集・近代絵画と能》―水底の彼方から―
会場・国立能楽堂能舞台

能（玉井 龍宮城）新演出概略

◆配役

豊玉姫・梅若紀彰

玉依姫・川口晃平

海龍王・梅若実（玄祥改め）

彦火々出見尊・福王和幸

栄螺の精・野村又三郎

鮑の精・松田高義

板屋貝の精・藤波徹

蛤の精・奥津健太郎

法螺貝の精・野口隆行

笛・杉信太郎

小鼓・大倉源次郎

大鼓・國川純

太鼓・小寺真佐人

後見・梅若長左衛門／小田切康陽／山中近晶

地謡・観世喜正(地頭)／山崎正道／鈴木啓吾／角当直隆／

佐久間二郎／坂真太郎／中森健之介／内藤幸雄

◆面装束

【前シテ(豊玉姫)】

泣増／衿・白二ツ／摺箔／唐織着流／鬘扇／無地金塗水桶

【前ツレ(玉依姫)】

小面／衿・赤／摺箔／唐織着流／鬘扇／無地金塗水桶

【後シテ(海龍王)】

悪尉／白頭・大龍戴輪冠／白地厚板／白地袷狩衣／白地半切／鹿背杖

(無紅紅緞卷ク)／神扇／釣鉤

【後シテ(豊玉姫)】

泥眼／黒垂・龍戴輪冠／白地鱗箔／緋舞衣／緋大口／童扇／満瓊

【後ツレ(玉依姫)】

泥眼／黒垂・龍戴輪冠／白地鱗箔／緋舞衣／緋大口／童扇／潤瓊

※両姫は法華経に云う「南方無垢世界」に転生した善女龍王の化身の

心であり、海龍王＝沙羯羅龍王は紅龍であるから(五行説「南」＝赤色の比喩)ただし今回は海龍王は白式、両姫とも赤色を基調とした扮装とする。

【前ワキ(彦火火出見尊)】

唐冠／赤地金緞鉢巻／衿・紺／厚板／白大口／側次／劍／神扇

【後ワキ(同人)】

唐冠／赤地金緞鉢巻／衿・紺／厚板／紺地または萌黄地袷狩衣／半切

／唐団扇

【間狂言(貝尽) 貝ノ精いろいろ】

定メのとおり

◆作り物

一畳台・小宮(前後トモ)

※大小前に据える。小宮には緋色引廻シを掛け、観世流(楊貴妃)に倣い破風を正面に据える。最後まで残す。

立木付キ井筒(前場)

※正先に据える。井筒は常寸。上部に注連を張り下部に紅緞を掛ける。見所から見て右手前の角、(井筒)のススキ式に立木(曲がりなき直立)を立てる。前場「クリ」で引く。

◆型と展開

※特に注記なき時は原則として常の型に則る。

※今回は四番目物(略協能)として試演したい。

※全体サラサラと、流れよく進めたい。

【前場】

★最初に一畳台と小宮を大小前に、続いて井筒を正先に据える。

★ワキは独りで出、ワキツレは伴わない。出は半開口の演出を採らざる「名ノリ笛」で出たい（ワキが「名ノリ笛」で出て最初にサシを謡うのは脇方高安流〈雷電〉の替にありと仄聞↓復曲〈菅丞相〉で流用）。★ワキの名ノリは常よりやや位を持たせて「行ノ名ノリ」では如何か（常のとおり「真ノ名ノリ」だと作り物に挟まれて見えるのを避けるため）。

★ワキ「これに瑠璃の瓦を敷ける」でやや深く右ウケ、右手を伸べ、「臆門あり」でキツと面を切るように後方の小宮を見る型（本当に視界に入るほど深くは後ろに向く必要なく、作り物を見ているように見ればよろしい）。

★両姫の出の囃子は「真ノ一声」ではなく常の「二声」（越ノ段省略。段取ってすぐ幕上げ）。

★両姫の扮装は側次にも考えられるが新作能めくため避ける。唐織着流シの抽象性を良しとしたい。なるたけ豪華な唐織が望ましい。両姫とも右手に扇、左手に桶。

★「打掛」は聴く。この間にワキは正中に行つて床几に掛かる。豊玉は脇座からやや奥の地謡前、玉依はその次に下居。ここで後見は水桶と井筒を引く。

★《サシ》「しかれば高垣姫垣調ほり」「父母の神いつきかしづき」の二句はシテではなくワキが謡う。サシトメにワキと豊玉は向き合う。

★《クセ》上端「なほ兄の怒りあらば」はワキが謡う。

★《クセ》「奉りなば」でワキと豊玉とシカと向き合い、「外祖となりて」で兩人立ち（後見はワキの腰掛けた床几を引く）、「ただならぬ

姿」で兩人見合つたまま一足ツメ（夫婦契りの心）、「月日程なく」でワキは正面、豊玉は真横を向き、「三年を」で兩人下居。

★《掛ケ合イ》「かくて三年に」でワキは正面を向いたまま立ち、「わが国に」で豊玉に向くと、豊玉も下居のままワキへ向く。「御心安くおぼしめせ」で豊玉と玉依は立ち、「陸地に送りつけ申さん」で豊玉はワキに向いたまま一足出る。中入地「大鰐に」でワキは右に取りアユミ小宮に中入。豊玉、続いて玉依もそのままアユミ、豊玉は常座、できれば橋掛り際まで行き、「来序」で足づかいをしてから中入。玉依はこれに続く。

【間狂言】

★《貝尽》は大粹で野村又三郎家定本に従う。ただし、時間の関係で短縮を志すならば、オモアイ《立チシャベリ》の後、酒宴となり、立衆三（蛤の精）が酌を受けると、次に続く個々の小謡・小舞みな省き、オモアイ「是程目出度いに、唯今の酒盛の態をいざ一節謡うて往くまいか」に飛び、小謡《貝尽》（オモアイ舞う）でトメ↓今回は眼目の最後の小舞《貝尽》はオモアイ・栄螺の精が独占せず、各役それぞれが立って次々に舞い継いだ。

【後場】

★「出端」太鼓打ち出し、段を取って幕上げ。龍女と同装で玉盤を持った両姫出る。先に玉依、後に豊玉。玉依は一ノ松、豊玉は二ノ松に立つ。

★《一セイ》「光散る」で両姫向き合つて謡い、「曇らぬみ影」で両姫が正面に向くのに合わせて小宮の引廻シを下ろす。小宮には扮装を改めた

ワキが床几に掛かっている。

★《ノリ地》で早めに両姫は舞台に入り、一畳台の上、小宮の左右に玉盤を置き（向かって右に玉依、左に豊玉）。「海洋の宮主持参せよ」で両姫は一ノ松方向に向いて出（豊玉は正中から脇正面あたり、玉依はその後ろ）、二人もろとも雲ノ扇。

★「大ベシ」は省く。龍王は早めに幕を上げて出（《ノリ地》にならないうすぐ、両姫がアユミ始めたならそれを合図に幕を上げると良い。龍王は常のとおり左に釣鉤を抱え、右に鹿背杖突く）、一ノ松に立ち、地謡「海洋の宮主持参せよ」のあとすぐ続けて「真人の君の命に従ひ」と謡い掛ける（龍王、一ノ松で正面を向いて立ち止まる）。両姫は一畳台下、それぞれ自分の置いた玉を背にして正面を向いて下居。龍王は「海洋の宮主釣針を尋ねて」と謡いながらアユミ舞台に入り、正中から一畳台に進みワキに釣鉤を渡すと（ワキは立ち、台から右足を下ろして受け取る）、常座で床几に掛かる。

★「天女ノ舞」は二段。抽象的に、あまり意味性を考えさせず単純に見えるため型は定型どおり、位極めて軽く。舞アトは常どおり動き、脇座から地謡前に両姫居並ぶ。

★龍王の「舞働」は定型どおり。ただし、居立ちは適宜工夫があつて良い。

★「舞働」アトも基本的に定型どおり。「尊は御座を」でワキは立って一畳台から下り（両姫もワキと同時に立ち、ワキの邪魔にならないように一畳台前に行つて立ったままクツロギ、扇を懐中すると、後見がそれぞれに玉盤を持たせ、正面を向く）、ワキが正中に立つと「袂にすぎり」で龍王がワキの袖を取る（龍王は杖を持ったまま最後まで捨てない）。ワキ、少し半身となつて龍王と見合う型あつてよし。

★以下、常のとおり。ワキはそのまま右に取り「乗せ奉り」でノリコミ拍子を踏んで橋掛りに行くと、続いて豊玉、後に玉依、均等の間隔を空けて何事もなく幕に入る。

★龍王は杖を突いたまま左袖を巻き上げて常座に行きこれを見送り、袖を直し、脇正面を向いてトメ。

以上